
MRSを含む世界

三隅 凛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MRSを含む世界

【Nコード】

N6845W

【作者名】

三隅 凜

【あらすじ】

MRSが含まれた世界で、誰かの途中から途中、または終わりますの話。

※完結しない事が前提です。

m a i n 0 1 (前書き)

大した事ないですけど、血とか死体とか注意です。

main 01

父親の死体が目の前にあった。仕事に行く直前だったのかスーツ姿。背中と項からは包丁の柄が生えている。服には血がこびりついている。血溜まり。そして包丁を持った母親が、俺に向かって駆けて来ている。

殺人症。

重いだけのスクールバックを投げ捨て、人気の多い道を選んで近所の本屋まで走った。腕時計を見る。現在、十八時三十四分。

本屋に到着。母親は大分前から居なくなっていた。誰かを何処かで殺している最中かもしれない。息を整える為に休憩。本を取る。本のタイトルは『コレで分かる！ MRS!』というまあ胡散臭いものである。何が胡散臭いって、あの病気、未だに『症状を和らげる』薬はあるが、『病気を治す』薬はないんだから分かる訳ねェだろという事実である。

『コレで分かる！ MRS!』の第一章から抜粋。

MRS。和名は『殺人症候群』。Murder Syndrome を略してMRSである。

複数のウイルス感染が原因である。

血液検査で発見出来る。

MRSの人は人間全てを殺したくなる訳ではなく、自分の『条件』に合う人を殺したがる。

条件は『十歳以上の女』や『三十歳から五十歳までの人』等で、個人差がある。

条件の範囲は自分にしか分からない。検査で判別出来ない。

条件の範囲の広さで、青、黄、赤、黒に分けられる。青が一番範囲が狭く、黒が一番広い。赤と黒のMRSの割合は全MRSの三割程度である。

赤、黒の人は十九時から七時まで、眠り続ける。

個人差があるが、身体能力が上がる。

既知の情報しかなかった。本を戻す。

これからどうするか。どうすべきかは明らかで、警察に連絡すべきである。でもそれは折角のチャンスを捨てるようなモノだ。大体、保護されたらされたで俺はどうなるのだろう。まあ幸い、財布はスクールバックではなく今も背中にあるリュックサックに入れてあるので一夜明かすくらいは金銭的には問題ない。問題は制服だ。外見年齢は二十歳超えてそうな俺だが、制服は明らかに地元の高校のモノだ。コスプレと言いい張るしかない。

店の時計を見る。十九時三分。

父を殺して、俺にも殺意を抱いたんなら、結構いい賭けではないか。

腹括って、家に戻る事にした。

母は庭に座り込んで眠っていた。普通は庭で眠ったりしないから、腹括った甲斐はあった。おそらく俺が逃げた時に諦めてさっさと引き返したのだろう。被害が出るように誘導しておいて言う事ではないが、被害がないなら良い事だ。家に入り、風呂を沸かす。服と金の用意をする。父の財布と、母の財布と、俺の全財産。合わせて十三万ちょい。それを三つの財布に分けておく。『お風呂が沸きました』というアナウンスを聞いて、風呂に入る。六時半くらいまで家で休もうかと思ったが、玄関付近に父親の死体ある家で眠るのは御免だ。庭に殺人症の人間まで居るし。

近所のネットカフェにでも行こうか、とリュックに手を伸ばしたがその前に思いっきり前に跳ぶ。背後に人間が居たからだ。そうい

や鍵かけてなかったな。

「チャイムは聞こえなかったんですけど。丁度風呂と被ってたんですかね」

「いや、押してないだけだよ」

若い男の声。振り向いて男を見る。身長は百七十くらいだろう。右手にナイフを持っている事を除けばまあ普通である。

「じゃあ警察呼んでいいですか。不法侵入だって」

「出来れば止めて欲しいな。君だってそうだろう？」
まあね。

「てか君凄いな、見ないでさっさと回避するんだもんなあ。視力低いらしいから、もしかしてそのお陰で気配が分かる、みたいなの？」

「なんで人の視力が低い事知ってんですか。気配は知らないですけど、足音が聴こえたんで」

「成程。耳がいい訳だ。……コンタクト？」

「基本的には眼鏡ですけど、今は裸眼です」

「……危なくない？ 0・1ないんだろ？」

そこまで知られてんのか。

「別に、そこまでないですよ。車運転する訳じゃないんですし。そして何の用ですか」

真っ先に訊くべきだった質問をする。男は特になんでもない事のように話す。

「俺は殺し屋なんだけど。とある人から君等一家を殺してくれって頼まれてね。でも父親は既にやられてるし、子供は強そうだし、母親は行方不明だし困ってんのさ」

「母は庭で寝てますよ」

「……マジで？ 何で庭？」

「今日から殺人症になったっぽいです」

マジかよ、と男は頭を抱えた。気付けよ。

「……さっきから和やかに話してますが、俺の事殺さないんですか？」

「殺さないよ。一発目避けられたら諦めるって俺ルールあるから」
「はあ、じゃあ母を殺します?」

「後でね。一応クライアントから幾らか貰えるなら貰いたいし」
へえ、と呟く。

「止めるかい? それなら俺ルールを超えて君に手エ出すけど」
「それは困るから、止めませんが。出来れば俺が出て行ってからにしてください?」

「勿論。ところで君、今日からどうするの?」

「ネカフェでも行こうかなと」

「お金は?」

「貯金がありますよ」

「君さ、バイトしない? 俺の所で」

「殺し屋の家で?」

「実際に誰か殺してってのはないよ。殆ど雑用。給料はそこそこ。どう?」

「……考えて置きます」

「どうも。じゃあコレ。名刺じゃないけど、俺の住所とケー番とメールアドレス。落とさないでね」

名刺みたいなものを渡される。コレを警察に持っていったら愉快だが止めておこう。

軽く手を振って、近所のネットカフェに向かった。

朝の五時半に目が覚めた。やるべき事を終わらせて、暫くはネットカフェに引き籠ろう。今日は大雨だ。会計を済ませて、持っていたレインコートを着て傘を差す。

近くの川まで散歩しよう。

川の水は澄んでいない。尤も、それはいつもの事という訳ではなく大雨だからである。リュックの中から畳んでおいたショルダーバッグを取り出し、中に財布を入れる。金額は三つの財布の中で一番

少なく、二千三百円が入っている。他にもカラオケの会員カードとか色々。それから生徒手帳と携帯電話をバッグに入れる。次にリュックから傘と靴を取り出し、川に放り込む。コレは割とどうでもいい。いい感じになりますようにと祈りながら、シヨルダーバッグを川に放った。

不法投棄終了。後は暫く、ネットカフェで引き籠ろう。

漫画呼んでパソコンして寝て、一日経ったので会計を済ます。今日は昨日とは対照的に、晴れている。なので殺し屋さんの家に行こう。駅へ向かった。

電車で揺られ、バスと徒歩を駆使して彼の家に辿り着いた。安っぽいアパートの二〇一号室。呼び鈴を鳴らすと開いているから入って、と叫ばれた。出不精なのかもしれない。遠慮なく入ると、テレビ観ていた。

「丁度良かった。いくつか訊きたい事があったからね」

「その前にいいです？ お名前は？」

「吉沢裕也。適当に呼んでいいよ」

「じゃあ吉沢さん。俺の事、どれくらい知ってます？」

視力低い事とか知られてたし。結構気になっている。

「坂井真。十七歳。高校二年生。理系。家族構成は父、母、自分。誕生日は五月六日。元陸上部の短距離走者。多分こんなモンかな。他に何かある？」

「いえ、特には」

「じゃあこっちからの質問、の前に報告が一つ。君が家から出てって五分くらいしてさ、君の母親殺そうとしたんだけど庭に居なかったよ。世間的にも行方不明扱いだし」

「へエ。誰かが攫ったんですかね」

「さあ。じゃあ質問ね。君今までさあ、何処で寝泊まりしてた？」

「近所のネットカフェで」

「ああいうとこってさ、二十四時間営業でも高校生は八時か十時くらいまでしか駄目なんじゃない？」

「高校生に見えます？」

吉沢さんは苦笑し、ノーと暗に答えた。

「でもさ、ああいうとこって会員登録しなきゃ駄目なんじゃない？それなら外見じゃなくて会員カード的なのでバレるんじゃない？」

「まあお客様にそういうのは言いづらいんじゃないですかね。現に言われませんでしたし」

「まあ俺は学生時代に夜遅くまで遊んだりしない人間だったからそこらへんは分からないけど。母親は行方不明扱いって言ったけど、君も行方不明扱いなんだよね。言われなかった？」

「割と適当なんじゃないですかね。そう珍しい名前でもないですし」「どっかの川で君の荷物が見つかったらしいけど」

「邪魔だったんで不法投棄しまして」

両手を挙げて、降参、と彼は言った。まあ財布が邪魔な訳ないしな。

家出なら見つかる事前提だが、川に流されたと思われたら、見つからない事が前提の行方不明だ。

「金勿体無いんで今日泊めてくれませんか？ 住み込みのバイトですよ」

「女の子にンな事させる勇気ないな、俺」
しょうがない。今日もネットカフェで我慢するか。

main 01 (後書き)

後半台詞多いとか、落ちが弱いとか反省する事は結構あります、はい。

一話なんで説明多いのしょうがない、と割り切ってみる。

side B 01 (前書き)

血とか死体とか、一応注意です。

公園のトイレの個室で震えている。理由は単純で、さっきまで殺されかけていたからだ。スクールバッグは逃げる途中で捨ててしまった。何処で捨てたかは覚えていない。

俺を殺そうとしたのは一緒に帰っていた友人で、いつも通り駄弁っていたら急に俺の首に手を伸ばしてきた。何の冗談かと思ってたら殴りかかってきたので殺人症だと判断して逃げ出した。ここ十年くらいウチの県は殺人症候群の発症率が上がりになって国内ダントツ一位らしいし。

田舎だから障害物もないし、殺人症なら身体能力上がってるだろうから、逃げ切れたのは運が良かったんだろう。人気がないから俺が逃げた所為で誰かが死んだ、とかはないだろう。安心。

これからどうすればいいんだろう。警察に連絡したいが、携帯は捨てたスクールバッグに入ってる。腕時計を見ると七時三分。電波時計だから正しい筈。問題は俺を殺そうとした友人は赤か黒判定かどうかだ。殺人症のおよそ三割でなかったら、今も活動している。でもこのままトイレに引き籠る訳にはいかない。何百メートルか先にコンビニがあるから、そこに行こう。すぐに対応してくれるだろう。これを機に両親がネグレクトを止めざるを得なくなるかもしれない。

震えたまま、外に出た。大丈夫だ、人は居ない。誰か来たって逃げ出せる。高校男児にしては走るの速い方なんだ。でも震えが止まらない。殺人症は身体能力上がるんだ。でも大丈夫。だってコンビニはそんなに遠くないんだから。

何メートルか先に小規模なトンネル。薄暗いトンネルの真ん中に、死体があった。

さっき俺を殺そうとした友人が、血溜まりの上で寝転がっている。

何秒か何十秒かの記憶がない。気が付いたら吐いていた。

でも良かった。コレで俺を殺そうとした奴が居なくなった。んな訳ねェだろ。自殺には見えないから、誰かに殺されたに決まってる。コイツと俺、歳も性別も一緒なんだぞ。殺人症の患者が殺したんなら、俺だって対象になる。殺人症だけじゃない。殺人鬼だったとしても、殺人犯だったとしても殺されるかもしれない。嫌だ、殺されたくない。あんな怖い御免だ。友人に殺されるのも、知らない奴に殺されるのも御免だ。

殺されたくない。だから俺を殺そうとする人が居るかもしれない所に行きたくない。でもそれが何処かは分からない。一定の場所とも言えない。コンビニまで百メートルちよい？ 全力で走っても十何秒か掛るんだぞ、その間に殺される。でもここだって安全じゃない。少しは人が通る場所だ。嫌だ。殺されたくない。あんな怖い思いするくらいなら、死んだ方がマシだ。ちよつとした矛盾。いや、死にたくはない。けれど、こんな。人殺しが存在するような場所で生きていけるか？ 無理に決まってるだろ。クソ、携帯がない。生きる方法が分からないってのに。

「大丈夫？」

誰かの声。反射的に振り返る。殺人症だとしても、俺が範囲に入っていないタイプだろう。その男は苦笑しながら言った。

「大丈夫じゃなさそうだね。歩ける？ ——その人は後でなんとかして貰うから、君は帰った方がいい。家は近い？」

近所、と何とか答えた。

「それは良かった。じゃあ同行させて貰える？ 一人じゃ危ないだろうし」

顎を引いた。

帰る途中でスクールバッグを拾った。同行して貰っている男がそ

れを持った。少々申し訳ないが、有難い。少し歩いたら誰かとすれ違ったが、殺されなかった。その時に、変なのに捕まってるって冗談めかして言われたけど、顔が見えなかったから誰かは分からなかった。

家の前に着いた事を伝える。バッグを返して貰って、軽く挨拶した。男の人は朗らかに笑った後走り去った。結局、殺されなかった。家族と一々会う気はしなかった。部屋に戻って鍵を掛ける。大丈夫。これで家族は俺を殺しに来ない。

明日は学校だけど、誰かが俺を殺すかもしれない。これからどうしよう。

s i d e B 0 1 (後書き)

なんでBなのかはいつか分かると思われ。
次はCで、そのあとmain に戻ります。
説明が減ったからだな……短い。

side C 01 (前書き)

直接的に死体と血は今回出てないんですけど、会話がいつもより物騒なので注意です。

side C 01

現場に戻ってからにしようかと思っていたが、時間が勿体ない。走りながら電話する事にした。相手はすぐに出た。

「はいもっしもしー」

『よお、ちゃんと眠らせたか?』

「ゴメン。殺しちゃった。ナイフで」

『……おい。血は?』

「勿論どつくどく」

『それ、こっちじゃ処理出来ねエだろうが』

「悪かったって。で、死体処理してくれる?」

『ん、今コイツ腹ペコだからすぐ食ってくれると思うぜ』

「いーよねお前のワンコ達。ある程度は水だけでオツケーで、食べる時がつつり。育てるの楽だろ?」

『丈夫な首輪が要るけどな。んで、場所は?』

「トンネル。……で、分かる?」

『犬にゃあ分かるみたいだ』

「生きてる人襲わせんなよ。後クライアントに血の処理要請と謝罪宜しく」

『お前が……クソ、嗜好が真っ当だと辛いな』

「そゆこと。じゃ、宜しく」

返事を待たずに通話を止め、携帯をポケットに滑らせる。後はこの田舎な道を適当に歩きながら相方の連絡を待とう。

三つ目の自動販売機を目撃し感動しているあたりで、先程目撃者を家に送る時に、すれ違った人とエンカウント。エネミーと判断。

……あれ、何で?

あちらさんもこちらに気付いたのか、目が合うと薄く笑った。納得、これは危ない。

「さっきの子は殺さないんです？」

いやなんか、話しかけるまでは良かったんだけど話しかけてから一気に隙がなくなったんだよね、あの子。「MRSじゃあないんだから。人殺すとかそんな物騒な事はしないよ」

「珍しいですね。殺人症の事をMRSって言うなんて」

「そりゃ正式名称で呼ぶだろ、普通」

「正式じゃないですよ。殺人症候群の方が正式に近いです」

「……マジ？」

ある程度はMRSに関係のある仕事をしている癖に知らなかった。お恥ずかしい。

「そうそう。さっきあっちのトンネルで死体見たんですけど。アレ、警察に言ったらヤバイですよ。貴方の人生」

……へえ。

「駄目だよ。そんな怖い事、人殺しに言っちゃあ」

今度は血を出さないように、素手でやろう。腹減ってるなら、一人増えた方が有難いだろう。そろそろ間合いだろう、と拳を構えたら突き出す前にキスくらい出来そうな距離に近付かれて、後は視界がこう、エネミーさんを見上げる形になった。成程、足払いでもされたか。

「……受け身は取れるんですね、流石に」

うわ、すつげエ下に見られてる。この人怖い。

「君さ、結構上手かったというか強かったけど。MRS？」

「いえ、ごく普通の元高校生です」

そうやって俺の腹を踏みつけて、立ち去る元エネミー。無抵抗だった自分が悲しい。

「別に警察には言いませんよ。面倒ですし。それではさようなら、殺人鬼」

「だから違うって。俺はMRSじゃあない」

「違いますよ。殺人症ではないでしょうけど、殺人鬼ではあるんでしょう？」

何で知ってんだろう。ちよつとこの情報量の差は不公平ではないか。分かったのは性別と戦闘能力が高い事だけだぞ。

しかし声も低かったし背も高いし、性別どっちか分かりづらかったな、あの人。

s i d e C 0 1 (後書き)

落ちねエなあ……。あと会話多めなのは反省点かなあ。
次はm a i n でその後やつとs i d e A です。

main 02

今まで色々な事があった……と回想する程長くも濃くもない人生だが、まあ最近はや々なった方だろう。元クラスメイトが何かやバくなってたり、少しだけ誰かの話に出た事のある殺人鬼と話したり。前者は放置だが後者はそうはいかない。こう、好奇心的な問題故。

現在の主な住居であるとするネットカフェの023室で、最近聞いた面白そうなネタを検索する。曰く、『ネットにある反MRS思想の宗教のサイトがある』そう。まあ宗教、というのは自称と俗称であって、法的には認められていない。違法な事もするらしいし。

幾つかのキーワードを組み合わせて、検索結果を三十件程スルーし、目当てのサイトに辿り着く。地味に面倒。

「――何だコレ。エロウサフルム？ ウロウシャフリユウム？」

読み方は組み合わせによっては更に沢山あるのだが。脳内で様々な仏教用語とか二字熟語とか四字熟語とかを検索するが、ヒットなし。パソコンの辞書にもないから、造語かな。

サイトの内容は宗教無関係なイラスト系。あんま好きな絵柄ではない。

ようし、裏サイト探すぞー、とか気合い入れたのに隠しリンク一個だけだった。Tabキーとenterキーで一発。マジかよ。まあ凝り過ぎるとお年寄りが辛いのもかもしれない。この後IDとパスワードを入力しないと裏サイトには行けないみたいだし。普通は此処からが本番なのだろうが、俺の場合は知り合いの情報屋が居るので問題ない。軽く数字とか打ち込んで、『会員031』としてサイトを流し読みする。宗教系で会員って言うのか。いや、問題はないけど。主な活動内容は殺人症の撲滅で、具体的な方法は怪しい人攫って血液検査して殺人症だったら殺す、という物騒なモノである。仕事報告を見る。あ、コレ母親だ。他にも懐かしい顔がちらほら。

ネットカフェを後にする。殺し屋さんに、仕事を依頼しよう。

「エロウサフルム教？」

「いや、読み方分かんないんですけど。反殺人症思想の宗教だそう
で」

「んー……。あ、ウルザブルン教かな」

そう言うのと携帯電話を開き、先程見たイラストサイトのトップページを此方に向けてきた。

「コレだよね？」

「ええ。……ウルザブルンって読めませんよね、コレ」

得弄砂布流無って。全部無理がある。『無』で『ん』が一番非道い。あんまりだ。

「読めない読めない。意味分かんないしねー」

「ま、漢字は完全に当て字ですよね」

特に洗浄効果なさそうだし。

「で、訊きたい事ってそれだけ？」

「いえ、もう少し。知り合いに殺人鬼とか居ませんか？」

「数人居るけど」

世も末だ。

「ええと、本名かは知らないんですけど、トミナって人知ってます
？」

「茶髪の男なら知ってる」

「じゃあ次はお願いというか依頼です。その人殺そうとしてくれ
ません？」

「いいよ。……って言いたいけどさ、殺そうとするって何？」

「一発だけでって事です。それで死ぬか、俺みたいに避けるか、掠
る程度だったかってのが知りたいので」

「……ふうん、いいよ。それさ、殺していいって事だよね？」

「ええ、勿論。……あ、幾らくらいですかね」

「殺せたら頂戴。……あー出来れば前払いで御心ばかり」

「二十万で大丈夫です？」

「君はもっとお金を大事にしないで。家出少女が提案する額じゃねエだろ、それ。……所謂、スリ？」

「いえいえ。合意の元頂いております」

「あんま詳しく聞きたくないなあ、それ」

いや、大した事ではないんですけどね。

「興味本位で訊くんだけど、ここ数日はずっとネットカフェだった？」また訊くか。

「ええ。あ、でも今日と明日はお金を大事にする為に女の家で寝てきます」

「……俺は羨ましがればいいのかな」

「異性愛者ですけどね、俺」

「あー……性自認は？」

「一応女です」

言い方の問題ってだけである。

結局前払い金は二万円になった。吉沢さん家を後にして、公衆電話に向かった。

一応事前に言っとかないと、ねエ。

m a i n 0 2 (後書き)

とうとう一話で落ちてないのは、次が続くからです。

side A 01 (前書き)

今回はグロ関連は一切ないです。今まででも大した事ありませんでしたが。

side A 01

携帯電話が着信を告げる。珍しく非通知。いつもの面倒事だった。コレの所為で、私は今日と明日は遊べない。

パソコンの電源を入れて、風呂を沸かす。風呂が沸いてすぐに、ドアが開いた。一瞬だけ、鏡が目の前にあるのか、と錯覚した。差異はあるのに。

身長は私の方が何ミリか低く、体重はあちらの方が数キロ重い。しかしあちらは筋肉があるので、スタイルは私より良い。似たような服を着ている。外見では分らないが、同姓同名。そして顔が一番似ている。入れ替わりは不可能でも、一卵性双生児といい勝負だろう。

彼女は「お邪魔します」と冗談めかして言った。

「このバッグの中の服、洗濯してくれる？ こっちはテーブルに置いて。じゃ、俺は風呂に入る」

リュックサックとコンビニのレジ袋を私に手渡し、彼女は風呂に入った。

「真サンはさ、一応は大学四年制のトコ行ってたよね？ 学部とか何だっけ？」

「経済学部、経済科」

知ってる癖に、とは言わなかった。

「そーなんだそーだったんだー。あ、水持ってきてー」

冷蔵庫から水を取り出し、グラスに注ぐ。彼女に渡すと「どーも」の気の抜けた声が返ってきた。

私のパソコンを当然のように使う、六歳年下の少女。逆らえない。「今日はもういいよ。何かあったら部屋に行くから」

この台詞は出ていけ、という命令に等しい。
でも、その前に。

「……さっきから何してるの？」

「チャット。四窓中」

私も昔チャットしてたが、四窓はひどい。

「……お休み」

「お休みー。明日の朝御飯は適当にサンドウィッチとかでいいよ」
この人は何時に寝て、何時に起きるのだろうか。それが分からないから明日は早起しなくてはならない。幸い、サンドウィッチの材料はある。携帯のアラームをセットして眠った。

朝目覚める。アラームが原因ではなく、知り合いからのメールの着信が来たからだ。

「……げ」

思わず声が出る。何でこんな日に。

とりあえずリビングに向かい、水を飲む。彼女はまだパソコンをしている。

「起きたばっか？ 寝てない？」

「おはよ。まだ寝てないね。あ、どうせだからサンドウィッチ作って」

「いいけどちよい相談。今日カラオケ行かない？ って知り合いに誘われたんだけど、行っていい？」

「どうぞー。あ、会員カード的な要る？」

「要らない。それと、免許証」

「え、車のだよね？ 使うの？」

「私以外に運転出来る奴居ないから」

「悲惨だねそれ。男も行くんだろ？」

何で分かるんだろう、なんて疑問は薄い。昔の経験の所為だろう。彼女は自分のリュックサックから財布を取り出し、免許証を指の間に挟む。

「はい、貸してあげる。事故らないようにね」

貸してあげる。まるで自分の物みたいな言い方だ。

……そこまで間違ってもないか。もう。

「どうも。夜には帰るから、宜しく」

「了解。じゃ、今日も泊って明日の朝帰るよ。サンドウィッチはテーブルに置いて。カラオケは今から？」

現在四時五十分。待ち合わせ時間は八時だが、出来るだけ彼女の傍に居たくない。

「うん。じゃあ行ってくる」

「行ってらっしゃい。適当に御飯食べとくから、俺の分は気にしないでいいよ」

その台詞に忠実に従った。

暫くドライブしてから友達を車に乗せて、カラオケで十時間程歌って家に帰った。彼女はソファで寝ていたが、すぐに目を覚ました。「おかえり。免許証返してくれる？」

「……質問。行方不明って聞いたけど」

「ガセネタだよ」

まあ、殺して死ぬ様な女じゃない。免許証を返して、または貸して、私はそのまま眠った。

「おはよ、真サン。お休み中だろうけど俺もう帰るから」

早朝四時半に叩き起こされた。

「……免許証」

「返して貰ったよ。カラオケはいいんだけどさ、ネカフェの会員カードとかポイントカードとかある？ 全部頂戴」

バッグから財布を取り出し、差し出す。彼女はカードを数枚引き抜き、自分の財布に収めた。それから自分の財布から数枚紙幣を取り出し、私の財布に入れた。

「はいお疲れさん。今月はまた来るかもだから、掃除とかはちゃん

としててね。じゃあね」

ドアが閉まる音がする。寝直す前に、財布に入った金額を確認する。

「……最近あの人稼いでるのかな」

十二万はちょい多い気がする。けど多い分には問題ないし、いいや。

私は同姓同名の六歳年下の少女に使役されている。逆らえない理由は二つ。

一つは、情けない事にこうやって貰える金が有難いからだ。

s i d e A 0 1 (後書き)

次はおそらくs i d e Cです。

s i d e C 0 2 (前書き)

若干バトルっぽいのが入りそうで入らない感じです。

三大欲求は快感を伴うというのを昔何処かで聞いた事があるが、それ以外の行為に快感は伴わないかと言われればそんな馬鹿な話はない。例えば殺人行為。破壊行為の延長、ではない。同種であるヒトを殺した場合のみ得られる快感。何故、三大欲求の対極といえる非生産行為に快感を得るかという話だが、ソコはまあ、『俺だから』で問題ない。個性万歳。

ここ三日間程人を殺していない。今日誰も殺さなかったら四日間タダのニートしてた事になる。それはちよつと怒られそうなので、仕事しよう。場合によっては仕事ではなく趣味になるかもしれないが、金があるので問題ない。携帯電話で標的を調べる。ウルザブルン教の裏トップページに飛んで、IDとパスワードを入力する。MRSである断言出来る人間のリストのうち『顔写真あり』だけを選択する。ここに載っている人は、『発見したら攫ってこい』ではなく『発見したら殺して良し』。俺好みの人間である。攫ってくる仕事も時々するのだが、俺には難しい。目の前で無防備な人間が居るのに殺すなつてのは、ねエ。

……嫌な事を思い出した。数日前、正しくは最近人を殺した日。攫ってこないといけないのに殺してしまつて出来た死体を男子高校生に見られた。後ろから殺そうとしたが一切隙がなかった。後数センチ殺意を持って近付いていたら危なかった。しょうがないから家まで送る途中に殺そうと思ってたら結局ずっと隙がなかったから諦めた。何だアレ。武道の達人か。まあ、あの様子じゃ一番困る警察に通報、という選択は為されていないだろうから、安心した。安心したのだが、その後にもう一人、目撃者を発見した。殺人犯にあんな風に絡んでくるなんて命知らずな野郎だなあ、と思つたら違った。女だった。いや、そこは置いいて。命知らずではなく、強者の余裕だった訳だ。隙があったのも、余裕だったからだろう。あの人、

柔道でもやってんのかな。幸いこの人も警察に通報しないとは言っていたけど、気紛れで行動しそうな恐ろしさがある人だし、不安。

まあそんな感じで二回もお預けを喰らった所為で、三日しか我慢していないのに飢え、渴き、眠く、発情しているみたいに人が殺したい。今はまだ我慢が利くが、後二日くらい人を殺さなかったら、人混みの中だろうと交番の前だろうと人を見かけたら殺しかねない。昔、うっかり交番の裏で殺した事あるけど。閑話休題。まあ幸いな事に、人気のないこの田舎道にもたまには人が通る。しかも、一人で。

ポケットの中のナイフのケースを親指でずらし、すぐに取り出せるようにする。この、返り血とかが厄介な得物を愛用している理由は自分でも断言出来ない。おそらく、ハジメテが包丁だったからだろう。当初はフライパンの予定だったけど。

五メートル程先に居る男は、背は俺に近く華奢な方で、殺し易そうだ。

互いの距離が二メートルになった辺りで跳びかかる。狙いは心臓。後二十センチという所で、相手の右手が見えた。正しくはナイフが見えた。

自分のナイフが弾かれる。ナイフを離さない事に集中していたから、体はナイフと共に左へ傾く。相手はこちらの首を狙っていた。体を捻って避けたかったが、俺の左肩が少し削られ、血が噴き出た。あんまりだ。

「あー……うん、まあ殺人症でもなくて特別鍛えてもなけりゃこんなモンだろ」

相手は肩をすくめて、ナイフを仕舞った。

「MRSだって元の身体能力にプラスされるだけだから、場合によっちゃあ大した事ないだろ」

今まで、何人かMRS患者を殺してきた経験からそう言える。

男はへらへらと笑いながら俺に訊いた。

「さて、質問。俺を殺そうとしたのは仕事？ それとも趣味？」

コイツも俺の事知ってんのか。あの女といい、気に障る。

……いや、待て。俺の事を知ってて、仕事かどうかって事は。

「……MRS？」

「うん。青判定」

脳内で検索。

「吉沢……えっと、何だっけ？」

見た事あるこの顔ー。数分前に携帯でー。

「どうせ呼ばないから名字だけでいいよね。それと、仕事はちゃんとした方がいいと思うよ」

いや、人殺せて金貰えるならいいなあって思っただけだからなあ……。

気を取り直して。

「ま、青って聞けて安心した。それなら、元は知らないけど身体能力は大して上がってないって事だろ？」

「いや。あの判定、殺意の範囲だけだよ」

「……え？」

「どれくらいの人に殺意を抱くかで青、気、赤、黒に分けられる。身体能力の上昇は関係ないんだけど……ウルザブルン教で仕事貰ってんなら説明されなかった？」

「どーだったけなあ……」

成程。為になった。

吉沢は肩をすくめて、後ろを向いた。多分殺し屋だったから、さっきのはタダの自衛だろう。助かった。

こんな良い場所で殺せなかったのは残念だったが、相手が悪かったって事で「じゃあねトミナ。人喰い犬と飼い主に宜しく」吉沢が言い終わった辺りで右肩を切り裂いた。勿論狙いは首だったが、ギリギリで反応しやがった。

ま、仕返しにはなっただろ。

「ヘエ？ まだやる気あったんだ。相当だね、殺人鬼」

「一生そう呼んでりゃ諦めるさ」

「流石に鬼でも実力差は分かるんだ、トミナ」

今度は上手く捌かれた。勿論、実力差は分かっている。けれど、コレは駄目だ。生かしたらいけない。

「……何で俺の本名知ってんだよ」

ウルザブルンの連中だって知らないのに。名付けた奴は死んだのに。

「情報屋口説いて大金積んで酒飲まして恩売って吐かせただけ。：

…うんまあ、普通はこれくらいしないといけないんだけどね」

そう言って苦笑した。誰だその情報屋。殺さないと。

「……あ、そっか。人殺しが本名知られてちゃ危ないよね。でも残念。たとえ此処で俺を殺したって、依頼人は君の名前を知ってたからね。『トミナって殺人鬼を殺してくれ』みたいな事を言ってたから」

依頼があったのか。推測外れてた。

「じゃあ何でさっき帰ろうとした？」

「厳密には殺してくれとはちょっと違ったんだよ」

俺の血が付着しているナイフをこちらに向けて、吉沢は言った。結構、様になってる。

「こっちはお前を殺してもいいから、次で終わるぜ、殺人鬼」

ナイフをポケットに仕舞う。あっちがその気なら勝てる訳がない。諦める事にした。

三人も連続でお預け喰らった殺人鬼とは、惨めなモノである。

でもまあ、少し暗くなった人気のないこんな道を一人で歩く人も居る。

殺人鬼でもなく武道の達人でもなく、大した戦闘能力を有さない人間が。

s i d e C 0 2 (後書き)

今更ですが三点リーダー多いんだろうなあ、私。

m a i n 0 3 (前書き)

またエグいのなしです。

main 03

このネットカフェ、ちよいパック料金高いけど、飯美味しいな。そんな感想を抱きながら眠った気がする。毛布を蹴り飛ばし、体を起こす。もう朝なので、朝食を食べよう。メニューを開いて、三十分程アルコールの誘惑と戦った。酒への未練を捨てるのには三十分掛かったが、朝食を選ぶのには一分も掛からなかった。注文を済ませ、洗顔したりして飲み物片手に部屋に戻った。

朝食は予想、経験より早く来た。味も上々。早速、貰った会員カードが役に立った。食後にほぼ日課の、ネットサーフィンをする。気紛れにウルザブルン教のサイトに行く。勿論裏の方。殺害対象のリストを見る。この直接的なリストを見る度にコイツ等すぐに捕まるんじゃないかと思うのだが、身分詐称とかやってる身なので、まあ何とかいけるんじゃないかとも思える。実際、今の所は何とかなってるみたいだが。

殺人症だと判明している人のリスト、県内編。懐かしい顔がちらほらあるとかこの県大丈夫だろうか。それも勿論問題だが、一つ。問題というか、驚くべき事が。

吉沢さんは殺人症らしい。

何で俺はアポ無しで人の家に行ってるのだろうか、と考えて思い出す。そういや俺、あの人のケー番もメアドも知らねエ。後で覚えてたら教えて貰おう。無駄足は御免だし。

呼び鈴を押すと例の如く入って下さいと叫ばれた。宅配便とかだつたらどうするんだろう。

「吉沢さんって殺人症だったりします?」

「うん。言ってなかったっけ」

「ええ。範囲は?」

「青判定。九十歳以上の男。ま、人生で一人しか会った事無いけど。ソース、何処？」

「ウルザブルン教のサイトです。範囲までは書いてなかったの」「……え、君あそこの信者なの」

「いえ、誰かさんのIDとパスワードを知っているだけです」

「前々から思ってたんだけど、その情報網は何なのさ？」

大した事ないですよ、と言いながらコーヒーを啜る。少しだけ不服そうな顔をして、吉沢さんは溜息を吐いた。

大した事ないから教えるのは恥ずかしいだけである。

あ、と吉沢さんは声を上げた。

「思い出した、トミナの事。殺せなかったけど、肩は切れたよ」

「じゃ、間接的に俺が勝ってますね」

「直接的にも勝てると思うよ。それとトミナって名前知られてると分かると襲ってくるから、気をつけて」

「了解しました。えっと、お金は？」

「殺せなかったしいいよ。あ、でも出来れば一つ」

何でしょう、と促す。

「何か作ってくれない？　ここんと数日、ラーメンと米しか食ってないんだ」

独り暮らしでも自炊が出来ない人は出来ないという事を学び、吉沢家を後にした。メニューはオムライス。野菜多め。後、吉沢さんも肩を負傷している事も判明した。

とある喫茶店の隅の席に座り、ペペロンチーノのセットを注文する。サラダがテーブルに置かれてすぐ、待ち人が来た。

「ごめんなさい、遅れて」

「いいよ別に。こっちも急だったし。で、頼んだのは出来た？」

「ええ。でも、私……この人から口止め料貰っているの。大した情報も無いし」

「バレなきやいいだろ。いいから封筒寄越せ」

「……役に立ったらいいけど」

「あいよ。飯食うなら奢るけど」

「結構よ。珈琲だけ頂戴」

適当に返事して、封筒の中身を改める。確かに彼女にしては情報が少ない。坂井家皆殺しを依頼した人が誰かも分からない。

まあこんなモンだろう、と流し読みした書類を封筒に戻す。

珈琲を飲み終わった彼女が口を開く。

「何もないなら帰るけど」

「あーちよい待ち。山口拓也って知ってる？」

「貴女の元同級生ね。彼が？」

「ソイツの情報、一切漏らすな」

彼女は表情を曇らせた。立場を未だに分かってないのか、この女。仕方がない。バッグから封筒を取り出す。中身を見て、漸く彼女は首を縦に振った。嫌な世の中。

口止め料八十万。まあ、友人の為だしね。

m a i n 0 3 (後書き)

次はやつとside Bです。

s i d e B 0 2 (前書き)

特にエグいのないです。

学校帰りに友人が殺人症になって俺に襲いかかって来たのが、一度一週間前。もう同じ思いはしたくないので、一人だけ六連休を誰にも殺されかけずに過ごした。一応、欠席届けは提出しているけど。本来は今日から学校だ、と嘆く曜日なのだが、俺は今日もサボる気で居る。

後三十分ちょい寝たら連絡しよう、と思って布団に入る。眠りに落ちる少し前に、乱暴にドアをノックする音が聴こえた。跳び起きて、鍵が掛かっている事を確認。父親の怒鳴り声が聴こえた。基本的に両親は俺の事を居ない者として扱うが、世間体はそこそこ気にする人達なので、一週間近く学校をサボるのは許されないらしい。無視したかったが、ドアを壊したら困るので、今日は行く事を伝え御引き取り願った。準備を済ませ、部屋から護身用の武器になりそうな物を探した。

何もなかった。人を殺すのは簡単だから、身を護るのは難しい。それくらいは、知っている。

通学時も教室に入ってから、誰も俺を殺そうとはしなかった。電車の中では本当に怖かったが、まだ人が少なかったし。

一時限目の準備をして、廊下と窓を視界に収められる角度を探すが、中々に難しいので、主に廊下を見る事にした。ここは三階だから、窓から来る奴はそうそう居ないだろう。

五分くらいして人が来た。いつも一番乗りの友人は、驚いた様な顔をしたが、すぐにいつもの顔に戻り、荷物を置いて口を開いた。

「一週間振りくらいじゃね？ 風邪はどうだ？」

「まあ何とか」

「そりゃ良かった。そうだ……あー、その。坂井さんの事、坂井さんの事知ってるか？」

この場合、坂井さんという人物を知っているか、ではないだろう。仲良かったし。

「知ってる」

行方不明。しかも、何処の川から衣服やバッグが発見されたとか。

「だよな……それと、北山は？」

「知らない」と、嘘を吐いた。俺を殺そうとした友人の事である。

「アイツもだつてさ」

「……どっかで見つかるといいね」

しかし、北山は行方不明扱いなのか。報道規制でもされたのだろうか。良く知らないけど。

その後、少し気まずい空気のまま談笑し、予鈴が鳴って、席に着いた。

坂井さんは行方不明。良かった、俺を殺すかもしれない人が減った。

s i d e B 0 2 (後書き)

短いです。しかも多分暫く出番なしです。

次は m a i n より多くなるかもしれない s i d e C です。

side C 03 (前書き)

ちよつと猟奇表現あり。少しだけですが。

side C 03

タクシーから降りて、暫く歩く。いつもなら、バスに乗った後は歩くか走るかなのだが、左肩の負傷の事を考えるとそれは憂鬱だった。ウルザブルン教本部のビルに入った。

エレベーターで五階まで上がり、上司に当たる人物に会釈し、話し掛ける。挨拶抜きで。

「何人居ます？」

「二人だ」

相変わらず強面なお兄さんが答えた。ウルザブルンの人達は、MR Sは居なくなって欲しいけど人を殺すのは嫌だという人が殆どだ。一方俺は、誰でもいいから殺したい。

室内には、口にガムテープ貼られて腕も脚も縛られている男が二人居た。脚の方は足枷も。金髪と赤毛とは流石ヨーロッパだなあ、なんてどうでもいい事を思った。

「……ラテン系っぽいんですけど、何人で？」

「両方イタリア人だ」

そう言って、上司さんは踵を返した。殺害現場を見たくないからだろう。

さて、楽しむ前に少し焦らそう。自分を。二人の口のガムテープの端を恐る恐るつまみ、引っ張る。良かった、唾液が掛からなかった。

二人のイタリア人は呼吸を整えた後、何かを叫び出した。しかし全く聞き取れない。雰囲気は命乞いではなく暴言といった感じだ。

英語は通じるだろうか。発音は片仮名発音だが。

「シャラップ」

相変わらず惚れ惚れする程の片仮名だった。日本人がヒアリングする分には聞き取り易いだろう。二人は一瞬固まったが、すぐに罵詈雑言（多分）を再開した。少し固まったあたり、意味は通じたか

もしれない。少しすると、疲れたのか声量を少し押さえて金髪さんが何かを喋った。whatとfuckしか聞き取れねえ。

「パードウン？」

今度は怒鳴ってきた。したがって一単語も聞き取れなかった。しかしこの人、英語ペラペラじゃないですか。流石ヨーロッパ。

英語かイタリア語で数分間罵られ続けたが、聞き取れたのは一つだけ。

母親を犯した事なんて勿論ないけど、ふと疑問を抱いた。

「ファックって殺すって意味でも使えたっけ」

それならこのイタリア人MRS二人は人を見る目がある、という事になる、というよりはまあ、数撃ちや当たってモンだろう。

さて、異文化交流も飽きたし、さっさと本題に行こう。

首を絞めたり頭を殴ったりして約三分。もう金髪さんは死んでいる。息してないし、脈も止まっている。残る赤毛さんはどうやって殺そう。金髪の死体に腰掛け、考える。溺死とか楽しいかもしれない。でも水取りに行くの面倒だなあ。

部屋のドアが開く音がする。もう少し待って下さい、と言おうとしたら上司でも見ず知らずの処理係でもなく、相棒と黒い大型犬だった。なので、質問。

「ワンコが腹減らしてんのか？」

「そう。後はお前の怪我見に来た」

大した事ねえよ、と答えて立ち上がる。さあお食べー。

「もう一匹は？」

「久々に腹下した」

生肉やら血液やらだしなあ、食糧。

結局茶髪さんは金髪さんと同じ殺し方にした。死体の処理の現場はスルーして、とある喫茶店に向かった。

喫茶店の端の席に座っている女の人を発見。女の前に座る。

「席は空いてるけど」

「もう昼時なのにね、えっと……カキワラ、だっけ？」

女は薄く微笑んだ。カキワラ、というのは彼女の情報屋としての名前で、その名前を知っている者にだけ情報売る。会員031に信頼出来る情報屋を教えてください、と言ったら即答された女だ。

「幾つか訊きたい事とかあるけど、とりあえず。俺の本名知ってる？」

「知らないわ。私が知ってる貴方の名前は『サツキ』だけよ」

それ以外は使わないから、当然だ。いやまあ、カキワラが嘔吐きの可能性は否定出来ないけど。

「じゃあ次は仕事の話。山口って人、知ってる？」

「結構メジャーな名字じゃない」
そりゃそうだ。

「ええと。高校生男子で、此処から先の田舎に住んでる」

情報不足、と切り捨てられた。あの制服、何処の高校だっけなあ……。家の場所は分かってるんだけど、住所は分からない。

そうだ、と会員031に言われた事を思い出した。

「口止めて出来る？」

「貴方の情報？」

「金払えばいいんだろ？ 幾ら？」

カキワラは珈琲を一口飲んで、悪い笑みを浮かべた。
「三百万。払える？」

無理、と答えて席を立った。

今月は仕事が多い。今月二回目の仕事である。今月も何も、大体三ヶ月に一回くらいしか仕事はしないのだが。まあ一度目の仕事は一人も殺していないし、一人生き残りを出しているので失敗だが。

今回の仕事は或る女を殺してくれ、という楽な仕事だ。標的が坂井さんみたいな人なら話は別だが、特に体を鍛えている人ではないらしい。但し、標的の自宅というか行動範囲は俺の自宅から数駅程離れており、来た事がない場所である。全く土地勘がない状態である。そんな状態で仕事をするのは危ないので、適当に標的の自宅付近を散歩しよう。そう思って、電車に乗った。

改札口を抜けて、左右を見渡す。まずはコンビニを目指して歩こう。地図は一応持ってきているが、適当に行ってみよう。出来るだけ人気のない道を選んで。

ずっと直進していたが、気紛れに右に曲がった。珍しい事に、数メートル先に犬の散歩中っぽい人が居た。犬は黒のラブラドル：かな。飼い主の方はニット帽を目深に被り、マスクをつけている。グラサンがあったら最高だったのに、何て冗談は口に出さず歩を進めた。飼い主はリードを手放し、マスクの所為でくぐもった声で言った。

「イート」

犬はこちらへと駆け、首元を狙って跳び掛かった。座り込む、という残念な方法で回避。成程、あの男『Eat』って言ったのか。着地した犬はすぐこちらへ駆けてくるだろう。前傾姿勢で数歩走り、振り返って犬と向かい合う。口を大きく開けた犬を軽く屈んで避け、後ろ脚を切ろうとナイフを薙ぐ。避けられただけなら良かったのだが、軽く手首を蹴られた。軽かっただけマシだが。

犬はこちらの出方を窺っているので、こちらもそれに倣う。しか

し、視線は犬にあるが、意識は飼い主の方に向かってしまう。あの飼い主、顔は隠れているし声も聞き取り辛かったから分からなかったが、知っている奴だ。黒い犬を使って人を襲わせる男が市内に二人以上居たら初対面かもしれないが、市に一人居たら十二分だ。

「よォブリーダー。久しぶり」

飼い主ことブリーダーに話し掛ける。アイツの顔を見ながら話すのは少し辛いし犬は危険だしで、視線は犬から動かせない。向こうは返事をしない。

犬が跳び掛かってきた。今度は足元狙いだろう。こちらはその動きに合わせて、顔を狙って蹴る。犬の急ブレーキは見てて中々面白い。後ろに跳んで、距離を取る。

ブリーダーの方を見る。ニット帽を脱いで、マスクに手を掛けていた。露わになった茶髪を見て、アイツ髪染めたのかと思いながら、マスクが外れたブリーダーの顔を見る。

トミナだった。

「ハロー吉沢。お前殺したさに犬借りてきて会いに来たぜ」

「愛しさじゃなくて良かったよ」

道理で英語の発音悪い訳だ。マスク越しだから気のせいかと思っただけ。

トミナはカムヒヤとかカムヒアとか試行錯誤して、犬を呼び寄せた。

「あれ？ 殺すんじゃないの？」

「中々難しいって事が分かったから」

リードを拾い、俺ではなく俺の背後を見ながら、言った。

「飼い主にやって貰うよ」

背中から嫌な汗が流れ出した。

振り向いたら、ブリーダーが居たからだ。

「殺せてないじゃんサツキ。折角犬貸してやったのに」

「やー、やっぱ俺じゃコイツ使いこなせねェや。ヤル気出ないみたい」

ブリーダーは俺を素通りし、リードを持つ。それだけで、悪寒がする。

「一々お前の命令にも従うようにした俺の労力も考えて欲しいね」
トミナとブリーダーは向かい合って話している。一つ、悲しい決意をして行動を起こす。

「そーいやもう一匹は？」

「只今休養中。もう少しで本調子かな」

「大変デスネ。じゃ、そろそろ吉沢どうにかしようか」

「ん？ ああ、逃げてるよ、ほら」

もう二人の声は聴こえない。トミナは一応こっち向いてたのに気付いてなかったらしい。

逆に、ブリーダーは俺に背を向けていたのに。嫌な事を頭から追い出す為と、犬に食われない為に走った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6845w/>

MRSを含む世界

2011年11月12日18時22分発行